Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-04

【研究編①】『播磨国風土記』神前郡条の研究（3）（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター 福崎町連携事業平成25年度活動報告書）

坂江，渉
井上，勝博
高橋，明裕
松下，正和

(Citation)
共同研究「福崎町の地域歴史遺産掘り起こし及び大庄屋三木家住宅活用案の作成等」,福崎町連携事業平成25年度活動報告書:41-51

(Issue Date)
2014-03

(Resource Type)
research report

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005623

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター

福崎町連携事業平成 25 年度活動報告書

共同研究

「福崎町の地域歴史遺産掘り起こし及び大庄屋三木家住宅活用案の作成等」

平成 26 年 3 月

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター

【研究編①】『播磨国風土記』神前郡条の研究（3）

坂江渉・井上勝博・高橋明裕・井上舞

はじめに

本編は、平成 25（2013）年度、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターに関わる坂江渉・井上勝博・高橋明裕の 3 名（以下、古代史チームと記す場合がある）による『播磨国風土記』神前（かむさき）郡条の共同研究成果の報告書である。

平成 23 年度から、古代史チームでは、播磨国風土記の神前郡条のうち、福崎町域を中心とする関連地域のフィールドワーク、およびそれを踏まえた各条の史料校訂、注釈作りと研究をすすめ始めた。とくに神前郡条冒頭部（＝かむさきの地名のいわれを語る箇所）・川辺里条・高岡里条と「神前山と坂戸の神」の問題などに焦点をしぼった分析を試みた。その成果については、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『ふくさき再発見　～歴史をたずねて～』において発表した（2012 年 3 月刊。本書については神戸大学学術成果リポジトリ http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81003852.pdf でみることができる）。

平成 24 年度には、各自が独自の研究を展開するとともに、2012 年 8 月 29 日～ 30 日には、『播磨国風土記』の神前郡多駝里条にみえる「八千軍野（やちくさの）」の比定地、福崎町八千種での聞き取り調査、およびフィールドワークを実施した。

このうち八千軍野については、風土記には、「八千軍（やちくさ）と云ふ所以は、天日桙命（あめのひぼこのみこと）の軍（いくさ）、八千（やち）あり。故に八千軍野と曰ふ」という地名起源説話が載せられている。その比定地は、地名の残り方からみて、現在の福崎町八千種とみるのが通説である。

八千種は、もともと江戸時代の旧村（大字）でいうと、「庄村」「余田村」「鍛治屋村」「小倉村」の 4 村から成り立っていた。このうち昨年度は、「庄村」と「鍛治屋村」に該当する地区の聞き取り調査とフィールドワークをおこなった。わずか 2 日間の調査だったので十分ではないが、その成果の一端は、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『共同研究　福崎町の地域歴史遺産掘り起こし及び大庄屋三木家住宅活用案の作成等』（2013 年 3 月刊）のなかに掲載した。

これに引き続き、今年度は、2014 年 1 月 18 日に、のこる余田地区と小倉地区の調査を実施した。また 3 月 10 日には、兵庫県教育委員会と加西市教育委員会とも連携しながら、八千種の余田と加西市吸谷町を結ぶ古道「弥勒坂」の実地踏査をおこなった。

聞き取りに際しては、事前に福崎町教育委員会から調査依頼をしていただき、各地区の役員、古老の方々から、地区内の歴史遺産、伝承、思い出等をめぐる聞き取りをすることができた。これにより、播磨国風土記の八千軍野や、古代の賀毛郡地域との交流関係の実態解明に向けて、たくさんの情報を得ることができた。ご協力いただいた方々には、心より御礼申し上げる。

また今年度は、神前郡内の伊和（いわ）大神伝承の分析をさらに深めることができた。播磨国風土記の神前郡条の冒頭には、「伊和大神の子の建石敷（たけしわしき）命、山崎村の神前山に在（いま）す。すなわち神在すによりて名となす」とある。これによると古代の神前郡の地は、宍禾（しさわ）郡（宍粟郡とも）にまつられている伊和大神と系譜上のつながり伝承をもつ一族が居住していたとも推測される。

そこで古代史チームの今年度の調査では、福崎町域を離れるが、現在も伊和大神の分祀（分霊）伝承をもつ神河町宮野地区の立岩神社をめぐる聞き取り調査も実施した。他町での歴史調査の成果を、福崎町の歴史の復元に役立てるためである。

本編は、こうした古代史チームメンバーによる調査・研究の成果である。それぞれの調査報告や論考の文責は各執筆者が負う。また『播磨国風土記』については、単に風土記と記す場合がある。

（坂江　渉）

第１章　余田地区・小倉地区・神河町宮野での聞き取り調査

一、余田地区での聞き取り調査

(1) 聞き取り対象と調査者

・2014 年 1 月 18 日（土）余田地区「交流広場八千種」にて（1030−1215）
・聞き取り対象者：A 氏（男性。昭和 17 年生まれ）、B 氏（男性。昭和 24 年生まれ）、C 氏（女性。昭和 26 年生まれ）、D 氏（男性。昭和 27 年生まれ）。
・調査主体：地域連携センター（坂江渉・高橋明裕・井上勝博・井上舞）、福崎町教育委員会（村上由希子・伊藤拓）
・市販の住宅地図コピーをもって、地区内のおよその領域を図示してもらう。

▲聞き取り会場にて

(2) 地区役員、人口構成など

・役員は 7 名。区長、副区長、会計、協議員など。
・戸数は 180 戸ある。
・垣内という地名のあるところが古くからの在所と思う。

(3) 入会地、山等について

・竹藪や山は個別財産となり、共有財産はない。したがって財産区もない。
・余田村の「村明細帳」（江戸時代）には入会地の記載がある。それが現在の何処にあたかるかは不明である。
・山全体は管理出来ていないので、かなり荒れてしまっている。
・住吉山（オタニ山とも）には、小学校に通っていたころ、弁当持参で登り遊んだ。
・行事として、山入りなどがあった記憶はない。
・小学校の遠足のときには、玉木十郎兵衛の墓に参ってから登った。
・江戸時代の「村明細帳」については、克明な研究をすすめている方がいる。「余田組庄

村」「太尾(ふとお)組余田村」「御領所地名」「郷倉」等の組合村等をめぐって。

(4) 水掛かり・農業用水・生業

・余田地区の田んぼの水は、基本的に、「深谷(ふこたに)池（普光池）」と「皿池」の 2 つの池の水によっている。
・「木の山」の小字のあたる辺りは、「天水」によっているが、猪等が出て、田んぼの管理が難しくなっている。
・村の中に雑貨屋があったが、買い物等は加西の方に出かけていた。
・油屋や干鰯屋と呼ばれる行商人もよく来ていた。紅屋も来ていた。
・薄物の筵を作っていた。脱穀はその筵の上でやっていた。
・精米は石臼ではなく、木臼でやっていた。
・箕をひいていた。唐箕については今でも使用している家がある。
・子どもが手伝う仕事はたくさんあった。

(5) 博労

・農家には必ず牛が一頭いた。
・牛は博労から得た。西光寺野あたりに市が立っていたと思う。
・飾磨津から運ばれてきた朝鮮半島の「赤牛」も来ていた。
・田原に元締めの博労さんがいた。

(6) 遊び、行事、講など

・小さいころは、大谷池でよく泳いだ。
・新池で、筏をつくって遊んだこともあった。
・北川という川で牛を洗っていたので、その糞尿などが流れてきて嫌だった。
・北川では洗濯もやっていた。
・あま講があった。子どものころ、頼母子講があった。
・嶺雲寺に講があったが、50 年前になくなった。
・報恩講もあった。

(7) 加西市の北条町、吸谷地区との交流

・衣服などは加西市の北条町に出かけるのがほとんどだった。
・加西に抜けるルートは、小倉地区を通る県道ではなく、余田地区の東部の「木の山」を通ることが多かった。それの方が速かった。
・山向こうの吸谷地区には、お風呂をよばれに行くこともあった。
・木の山の池のそばには、道標がある。ただし場所が昔の位置と変わっている可能性もある。

▲木の山の手前にある道標

（文責：坂江渉）

二、小倉地区での聞き取り調査

(1) 聞き取り対象と調査者

・2014 年 1 月 18 日（土）小倉地区集会所にて（1330−1500）

・聞き取り対象者：区長（昭和 17 年生まれ）をはじめ男性 7 名（昭和元年生まれ、大正 13 年生まれ、昭和 24 年生まれ、昭和 14 年生まれ、昭和 25 年生まれ、昭和 17 年生まれ）、女性 2 名。

・調査主体：地域連携センター（坂江渉・高橋明裕・井上勝博・井上舞）、福崎町教育委員会（村上由希子・伊藤拓）

・市販の住宅地図コピーや福崎町小字図をもって、地区内の当該箇所を図示してもらう。

(2) 地区役員、人口構成など

・役員は 7 名。区長、副区長、隣保長 4 名、会計 1 名。

・世帯では 39 戸、118 名ほど。そのうち 65 歳以上が 58 名で、小学生は 1 軒のみに 2 名、ほかに保育園児 2 名、中学生 1 名。

(3) 入会地、山等について

・区有財産としては若宮神社の宮山、ほかに 4 つ山がある（地図に示してもらう）。

・区有文書はない（保管しているものがあるにはある）。若宮神社の狛犬（瓦製）が 4 年前に展示され、今は堂のなかにしまってある。

・集会所は地蔵庵善福寺という尼寺で、50 － 60 年前、子どもの頃には尼さんが住職でいた。今は嶺雲寺の所有である。

・集会所の裏手の墓には、明治後期に墓守（守屋モリヤ）がいた。

(4) 水がかり・農業用水・生業

・池が 9 つあり（境池、小久保木池、浦山池、新兵衛谷池、柳谷池、新池、ムコ池、上池、墓浦谷池を地図上に示してもらう）、すべてため池灌漑である。

・境池から水をひく境界外の水田は小倉の人が管理していた。

・皿池は庄村が管理する池である。

・ため池の管理は人が集まらない。5,6 年おきに水抜きをしている。用水路の溝干しは全農家で年 1 回行っている。

・昔、地区内に 1 軒だけ雑貨屋があった。

・今、買い物はイオン、ライフ、ジャスコなど、北条へよく行く。

・小倉の人は県道を使う。境池の道から県道へ出る。

・子どもの頃はバス（神姫バス）が走っていた。
・県道は昭和 8 年に開通、自動車が通れるようになる。
・4 月 3 日の節句（桃の節句）に通うのに、子ども時分は歩いていった。
・鹿はいないが猪が多い。去年、山田で鹿を獲った。今は猟師はいない。個人の山は荒れて出入りができない。

(5) 遊び、行事、講など

・坂迎え：若宮神社の飛び地で伊勢講を迎えた。伊勢講は 10 年ほど前にやめた。
・県道端（小字「南池沢」付近か）の地蔵に今でも余田の人が毎日お参りしている。「宮ノ池」のところにも地蔵、道標がある。「岸本」のところにも地蔵がある。
・災厄を避けるなどの謂われはあまりない。
・若宮神社南側の斜面近くで「才の神」、トンド焼きの行事を行っている。昔は 1 月 15 日、今は第 2 月曜日に行う。トンドの「お頭」（「お塔」）が地区に 3 つある。

▲飯盛山と才の神（手前）

・トンド行事を 13 軒で 3 年に 1 回で廻している。他所に移住する人に名前だけでも残しておいてほしいと頼むほど、行事の継承に苦労している。
・「亥の子」は若宮神社の山の上（祠らしきものあり）で子どもが藁をたたいて回った。
・30 年ぐらい前に、宮山の山頂で松明をもって雨乞いをやった。
・若宮神社が地区の氏神である。神主は松永神社の宮司が務める。
・祭りは 2 月の初午、5 月 8 日の花祭り、7 月の祇園さん（若宮神社の隣）、もっとも大きいのは秋祭りで 10 月の第 2 日曜日に行う。
・初午は昔は嶺雲寺だったが今は西光寺宝性院（天台宗）の和尚さんに拝んでもらう。
・稲荷（「塚森さん」?）は岸本さんのところで拝んでいた。
・地区は 39 軒のうち 34 軒が天台宗で、ほとんど西光寺の檀家である。
・春日山の隣の小丘を飯盛山と呼んでいる。
・虫送りはしていない（鍛冶屋、庄はしている）。
・小学 3、4 年ごろため池で泳いだ。皿池で泳ぐことが多かった。学校にプールができてからため池では泳がなくなった。
・神隠しの話などはない。山田の池に大蛇が出る話があり、わらびをとりに行くのに恐かったことがある。
・正月の後、こよりを作り、餅のはしにつけた。
・山田とのつきあいはあまりない。昔は鍛冶屋との間で集落どうしのけんかがあった。
・通婚は加西が多い。

(6) 博労

・50 年ぐらい前まで牛を飼っていた。牛小屋はもうない。
・博労は庄、余田にもいた。九州の牛（赤牛）と黒牛が半々だった。雌が多い。
・宍粟の山崎に市がたった。

（文責：高橋明裕）

三、神河町宮野・立岩神社に関する聞き取り調査報告

(1) 聞き取り対象と調査者

・2014 年 1 月 19 日（土）1030 － 1200 に実施。
・宮野地区住民の自宅にて。
・聞き取り対象者：男性（1923 年生まれ）のほか、区長を含む男性 2 名。
・調査主体：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター（坂江渉・高橋明裕・井上勝博・井上舞）

(2) 地区役員、人口構成など

・宮野地区は世帯では 52 世帯、戸数 46 戸、188 名。小学生は 6、7 人。
・役員は区長、副区長兼会計、協議員 4 名、農会長 1 名。ほかに各隣保長（組長）。
・宮野地区は旧大河内町。

(3) 地区の祭りと山神さん

・ 立岩神社は宮野地区の氏神であり、村で経費を出して祭祀している。
・ほかに祇園さん、山神（サンジン）さんを祭っている。
・山神さんは 12 月 9 日、4 隣保で毎年交替で執行し、村全員が参加する。川向こうの祠へ行き、そこで食事をする。『ひめじ地域　農産漁村の伝承文化』（平成 12 年、播磨地域伝承文化研究会）を参照。
・祭りや神事の前に、お籠もりなどの行事はない。
・山神さんはきこり、炭焼き、植林など山の生業の安全を祈るためのものだと思う。
・宮野地区は立岩姓が多いが、1700 年前後に加門（?）姓の人々が住み着いたようであ（現在 7 軒ほど）。この人々が多可町（「タガチョウ」?）から大山積の神を勧請し、始めたのではないかと思う。

(4) 立岩神社の祭り

・立岩神社のお旅所は 2 ㎞ほど離れた小田原村の大将軍神社、5km ほど離れた八幡神社であり、秋祭りの宵宮に神輿が 1 年交替でお渡りする。
・1 月は交通安全祈願祭、3 月は春祭り、10 月第 2 土日（今は体育の日の前の日曜日）に秋祭り、12 月初めに霜月祭り（神主が祈願する）を行っている。
・神主は寺前の西藤さんであり、日吉神社も同じ。
・各隣保から 1 名の神社委員を出している。
・立岩神社の棟札（最も古いものは享保期）には上小田村、小田原村、宮野村の名称がある。
・立岩神社の右の境内社は事代主命で「コミヤさん」と呼んでいる。これは「小宮」ともいうが「子宮」のことではないか。左の境内社は稲荷。
・立岩神社の社殿の前には、河をはさんで巨岩が聳え立っている。

(5) 宍粟と大河内の行き来について

・上小田から宍粟へ抜ける坂の辻峠がある。ここには道標がある。ほかに中坪峠もある。
・宮野橋の西の県道を登り熊部を経て雪彦、夢前へ抜ける山道がある。
・宮野橋の西の峠に鉄塔を造る際、後期古墳が出土している。
・宍粟から神河町のことを「神西（シンザイ)」（神西郡）と呼び、神河から宍粟のことを「門主（モンシュ)」と呼ぶ。
・立岩神社の最初の鎮座地は現在の神社の川の対岸の岸壁で、Ｌ字形の場所にかつて祠があった。
・宍粟から山を越えてきた人々が宮野地区に来て最初に見た岸壁が立岩神社の最初の鎮座地で、これを祀ったのだろう。
・立岩神社の本殿は南向きであり、鳥居は西向きである。伊和神社を向いているのではないだろうか。
・八百比丘尼の文献には「野村」「西脇」の地が登場するが、宮野地区には八百比丘尼に関するような言い伝えは何も残っていない。

(6) その他の伝え

・小田原の薬師堂は、 小田原氏（小田原ダエモン？ザエモン？）がここに住み着いたことから小田原の地名がついたとも。
・イナコハンスケ、武田家臣太田垣、高橋ナシノスケヨリサダらの合戦譚あり。
・平成 10 年立岩神社の木造狛犬が盗難にあった。

（文責：高橋明裕）

四、弥勒坂の踏査

(1) 調査概要

調査日：平成 26 年 3 月 10 日（月）
目的　：古代の賀毛郡と神前郡の交流ルートの復元、および吸谷廃寺の歴史的位置づけを考えるため。
参加者：坂江渉（神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員）
高橋明裕（立命館大学非常勤講師）
井上勝博（武庫川女子大学非常勤講師）
井上舞（神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員）
松下正和（近大姫路大学講師）
中村弘（兵庫県教育委員会）

村上由希子（福崎町教育委員会）
伊藤拓（福崎町教育委員会）
萩原康仁（加西市教育委員会）
ほか 2 名

(2) 行程

12:00　歴史民俗館に集合。昼食の後、行程の打ち合わせ。
その後、福崎町八千種余田地区へ出発。

13:00　余田地区の通称「弥勒坂」入口に到着。
「弥勒坂」手前の分岐にある道標①（写真①）を確認。さらに峠の入口にもう一つの道標を確認（写真②）

写真①　道標①

写真②　「弥勒坂」入口付近の道標

13:15　「弥勒坂」の踏査を開始
※　ただし、途中まではかつての交通路と違う道を歩いたとみられる。当初は倒木等で荒れた道を登っていたが、途中から本来の道筋に出ることができた。
これは、「弥勒坂」入口にあった道標から分岐していたはずの、本来の入口が草木が覆い茂ってわからなくなっていたためで、踏査終了後再度道標付近を調査し、本来の道筋を確認した。

13:35　弥勒坂の頂上に到着。

13:45　加西市吸谷側に降りる途中、蛙岩を確認（写真③）

13:55　加西市吸谷側に到着。修布の井の伝承地を確認し、現地の男性（昭和 26 年生まれ。）から簡易の聞き取り調査を行う（写真④）。

写真③　蛙岩

写真④　修布の井の伝承地

14:10　修布の井の伝承地を出発。5 分ほどで吸谷廃寺に到着。
萩原康仁氏（加西市教育委員会）より同寺にかんする説明を受けながら、同寺付近に現存する観音堂を巡見
その後、吸谷側にある道標②（写真⑤・⑥）を確認。

写真⑤　道標②

写真⑥　道標②

14:45　吸谷から別名（加西市福居町）へ抜ける峠の踏査開始。
15:10　別名に到着
※　吸谷から別名へ抜ける峠は倒木が多く、道筋がわからないところも多かった。調査では峠を越えるのに 30 分弱を要したが、本来であればもう少し短時間で行き来できると思われる。
15:35　県道 410 号線沿いに東へ移動し、福井谷遺跡跡に到着。村上由希子氏（福崎町教育委員会）より同遺跡にかんする説明を受ける。

16:00	出発地点の、余田地区「弥勒坂」入口付近に到着。改めて二つ目の道標付近を調査し、本来の道筋を確認。
16:20	調査終了

四、県道8号線調査

(1) 調査概要

調査日：平成 26 年 3 月 11 日（月）

目的　：播磨一宮の「伊和大神」をめぐる東西交通ルートの復原と、周辺関連史跡等の調査のため。

参加者：坂江渉（神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員）
高橋明裕（立命館大学非常勤講師）
井上勝博（武庫川女子大学非常勤講師）
井上舞（神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員）
田路正幸（宍粟市教育委員会）

(2) 行程

8：30	宿泊施設を出発。途中、移動経路上にある安志姫神社や石作神社、伊和神社等の位置関係を確認。
9：40	一宮生涯学習事務所に到着。
9：45	田路正幸氏の案内で、庭田神社(宍粟市一宮町能倉)に到着。庭田神社境内（写真⑦）と境内の後方にある「ぬくい川」（写真⑧）を巡見。田路氏より神社および周辺地域にかんする説明を受ける。

写真⑦　庭田神社

写真⑧　ぬくい川

	また、神社の裏手から暁晴山と三辻山を確認し、それぞれの鞍部を確認。
10:25	庭田神社を出発。宍粟市一宮町福田地区の中坪峠と坂の辻峠の登り口付近で、再度山の鞍部を確認。
10:40	県道 8 号線上にある坂の辻峠に到着（写真⑨）。田路氏に説明を受けながら、峠の周辺を巡見し、神河町側にある地蔵を確認（写真⑩）。

※　降雪のため現認していないが、田路氏によれば、峠を神河町側に少し降りたところに道標もあるとのこと。

写真⑨　坂の辻峠（宍粟市側より）

写真⑩　神河町側にある地蔵

10:55　坂の辻峠を出発。神河町上小田で湯川（現小田原川）付近を巡見。
立岩神社（神河町宮野）に到着。神社の境内を巡見し、境内の前方、川を挟んだ場所にある「立岩」を確認（写真⑪）。

12:00　昼食

13:10　神河町岩屋地区に到着。同地区の「賽の神」（写真⑫）および、「賽の神」の下に祀られた五輪塔と付近にある住吉神社を巡見。

写真⑪　立岩神社前方の巨石

写真⑫　神河町岩屋の「賽の神」

13:30　「賽の神」を出発。高坂峠へ向かう。旧道は閉鎖されていたため旧道の踏
13:50　査は断念。県道 8 号線の高坂トンネルを通り、多可町へ向かう。
荒田神社（多可町奥荒田）に到着（写真⑭）。神社境内および付近を巡見。

14:20　調査終了

（文責：井上　舞）